

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	26220402	研究期間	平成26(2014)年度 ～平成30(2018)年度
研究課題名	マルチアーカイバル的手法による在外日本関係史料の調査と研究資源化の研究	研究代表者 (所属・職) (平成31年3月現在)	保谷 徹(東京大学・史料編纂所・教授)

【平成29(2017)年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準
A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○	A
A-	当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

(意見等)

本研究の核であるデジタルアーカイヴズの構築は、既存の海外史料マイクロフィルムのデジタル化などによって、着実な成果を上げている。この核を基礎に展開される9つの地域的项目も、海外の日本関係史料所蔵機関との共同研究などを通じて、新たな史料の調査・収集を進めており、プロジェクト間に多少のばらつきはあるものの、順調に研究を進めていると考えられる。総じて、本研究は研究期間内に当初の目標を達成できると判断される。

【令和元(2019)年度 検証結果】

検証結果	当初目標に対し、期待どおりの成果があった。
A	東京大学史料編纂所を中心に、16世紀～19世紀の在外日本関係史料のデジタル化を図り、アーカイヴを構築するという当初の目的は、計画通り達成されている。 また、9つの地域・テーマを対象とした重点研究についても、ロシア研究班は日本商人とサハリンアイヌとの交易帳簿(ロシア)を入手し、翻刻、翻訳を行い、また、松前藩蝦夷地奉行文書を発見するなど十分な研究成果を上げている。さらに、古写真の収集と解析を担当する研究班は、スイスでの展示や図録の刊行に参加するなど幅広い研究活動を展開しており、全体としてデジタルアーカイヴズの構築と活用が順調に行われたと判断する。